

4 新潟水俣病の原因究明

(1) 新潟水俣病発生源確定の過程

健康調査の結果、患者の頭髮から高濃度のメチル水銀が検出され、患者が川魚を食べていたことから、1965（昭和40）年6月16日に新潟大学の椿、植木両教授と新潟県の北野衛生部長は、「原因は川魚と推定される」と発表しました。

同年9月には、厚生省（現厚生労働省）に新潟水俣病中毒事件特別研究班が組織され、原因究明に当たりました。

研究班は、1966（昭和41）年3月に関係各省庁合同会議で、昭和電工鹿瀬工場の排水が原因であると報告しました。しかし、通産省（現経済産業省）が鹿瀬工場の排水口などからメチル水銀が検出されていないと異議を唱えたため、結論は保留され、「事件はメチル水銀化合物によって汚染された魚介類の摂取によって発生したものであるが、工場排水と断定するには不十分」という内容の中間報告にとどめられました。

その後も厚生省（現厚生労働省）特別研究班は汚染源の究明を続け、1967（昭和42）年4月、疫学的調査結果等を踏まえ、原因は阿賀野川の上流にある昭和電工鹿瀬工場の排水である旨の報告を厚生省（現厚生労働省）に提出しました。また、新潟大学と県は工場の排水口の水苔からメチル水銀を検出するなど、工場の排水が原因であることを明らかにしました。

(2) 昭和電工の反論－農薬説－

厚生省（現厚生労働省）の特別研究班は、昭和電工鹿瀬工場構内のボタ山と排水口付近の泥からメチル水銀を検出し、工場排水が原因であると主張しましたが、汚染源として疑われた昭和電工はこれに反論して、新潟水俣病は、発生が公表された前年に新潟県内を襲った新潟地震によって流出した農薬が原因であるとの説を取りました。

このいわゆる農薬説は、新潟地震の際に、信濃川河口付近の農薬倉庫から流出した農薬が阿賀野川の河口まで達し、その後※塩水楔^{えんすいくさび}によって阿賀野川を逆流して下流域を汚染したとするものでした。

主張の対立は、結果的に水俣病の発生原因の確定を遅らせる要因ともなりました。昭和電工は、1968（昭和43）年の政府統一見解において原因が鹿瀬工場で副生されたメチル水銀が基盤となっている旨の発表があった後も、この農薬説を主張しましたが、1971（昭和46）年の新潟水俣病第1次訴訟の判決に従い、原因は工場排水であることが確定しました。

※塩水楔…大きな河川の河口部では、海水が淡水より重いので川底の方にたまり、その上を川水が流れて、ちょうど海水の楔が川の方に入ったようになること。（木野 茂 編「環境と人間－公害に学ぶ」）



毎日新聞：1965（昭和40）年6月18日



新潟日報：1965（昭和40）年7月23日

(3) 昭和電工鹿瀬工場

昭和電工は、アルミニウム等の製造会社と化学肥料の会社が戦前に合併して設立されました。戦後の化学工業全盛時代に急成長を遂げ、日本を代表する化学会社になりました。

地元の東蒲原郡鹿瀬町（現阿賀町）は、昭和初期までは薪炭や木炭を特産とする山村地帯でしたが、会社は、戦前から戦後へと周辺地域の雇用をはじめとして地元と密接な関係を持つようになり、鹿瀬工場は、最盛期には2,000人を超える従業員を擁していました。

工場では、酢酸や酢酸ビニルの原料となるアセトアルデヒドを生産していましたが、やがてこの製造方法を変更したことから、水俣病の発生が公表される頃には、アセトアルデヒドの生産を止めていました。その後、鹿瀬工場はなくなり、現在は、セメント製品を作る昭和電工の関連会社が操業しています。



昭和電工鹿瀬工場の全景
(写真提供：新潟日报社)

5 政府統一見解の発表

熊本県及び新潟県で発生した水俣病の原因究明が、県、大学及び厚生省（現厚生労働省）などにより行われてきましたが、1968（昭和43）年9月に政府は、水俣病に関する政府統一見解を発表しました。

統一見解は、熊本で発生した水俣病は、チッソ水俣工場のアセトアルデヒド・酢酸製造工程中で副生されたメチル水銀化合物が原因と断定、また、新潟で発生した水俣病は、昭和電工鹿瀬工場のアセトアルデヒド製造工程中で副生されたメチル水銀化合物を含む排水が中毒発生の基盤として、各水俣病を公害として認定しました。

水俣病は、このメチル水銀化合物による中毒性の中枢神経系疾患で、海や河川を汚染し、食物連鎖により魚介類にメチル水銀が濃縮され、これを地域住民が多食することにより生じたものであるとされました。統一見解の発表は、新潟水俣病の患者発見の公式発表から3年、熊本での患者の公式発見からは12年が経っていました。



毎日新聞：1968（昭和43）年9月27日